

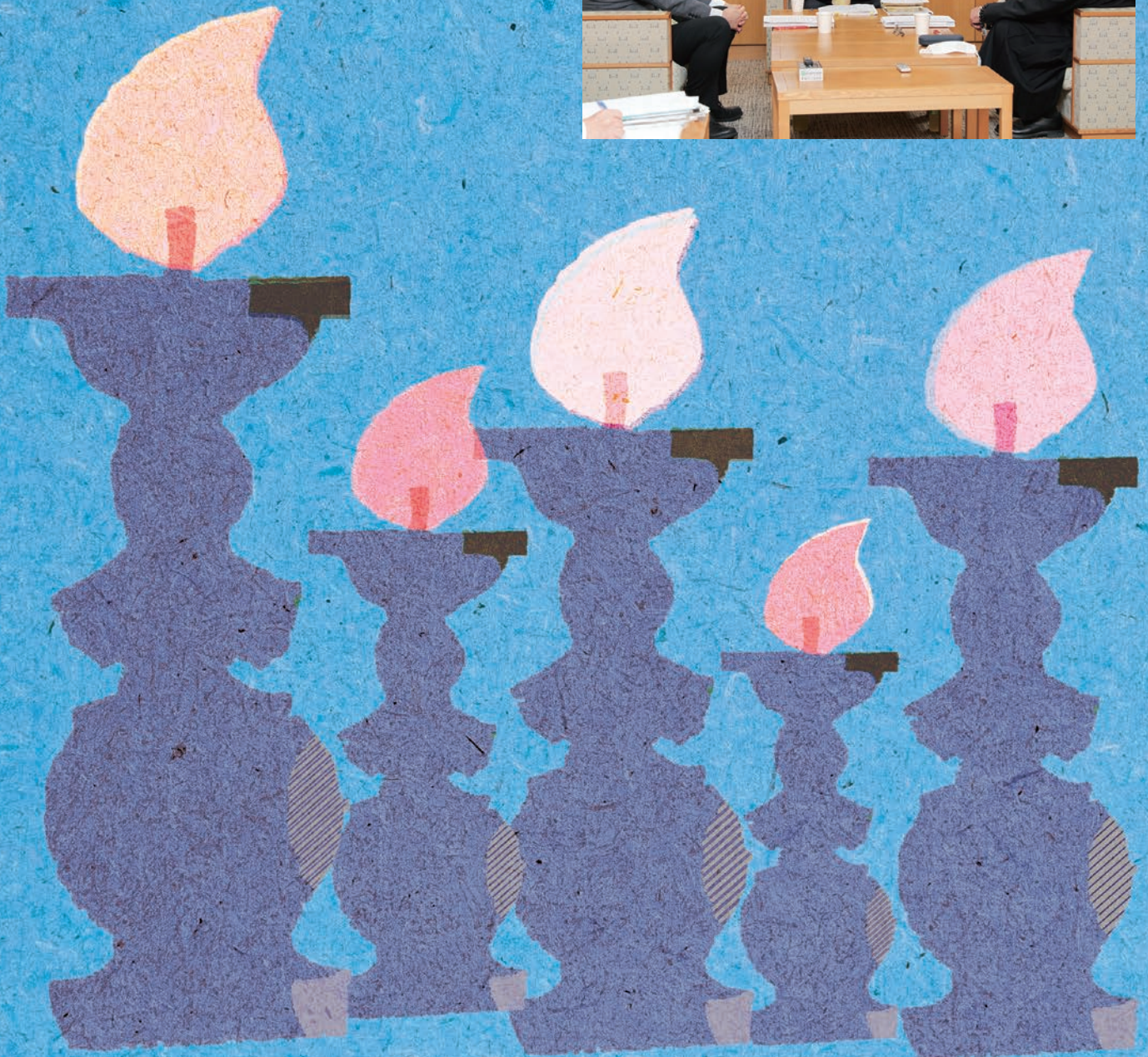
D^ダā^ーn^ナa

ダーナ／第41号
発行日／令和6年1月25日
発行人／廣瀬卓爾
編集・発行／浄土宗平和協会

VOL.
41

「ダーナ」とは
サンスクリット語で「布施」の意

浄土宗平和協会のホームページを
リニューアルしました!!



浄土宗平和協会 浄土宗開宗850年記念事業

浄土宗平和誓願の集い

《第2回北陸地区大会開催》



参加者に挨拶する廣瀬卓爾理事長

浄土宗開宗 850年記念事業「浄土宗平和誓願の集い」・並びに令和5年度浄土宗平和協会総会を昨年の東北地区に引き続き、北陸地区の福井教区大寶寺を会場に開催した。

浄土宗平和誓願の集いに先立ち開催した令和5年度総会では、任期満了に伴う役員改選の件を審議し、新理事に日比野郁皓師（東京教区権寺）、秦知宏師（尾張教区自然院）、若山敦子氏（京都教区阿弥陀寺）がそれぞれ承認、直ちに理事会を組織し、廣瀬卓爾理事長、山北光彦副理事長の再任と、永江憲昭師（福岡教区一心寺）の副理事長就任がそれぞれ承認された。

平和誓願法要では、当協会の会長である宗務総長川中光教上人御導師のもと、脇導師に福井教区教区長吉田悦應上人及び教化団長花木信徹上人に勤めて頂き、また教区内寺院による 式衆並びに詠唱浄友会の皆様、多くのご協力を得て、世界の平和を願い厳修した。

続いて、記念公演として、ウクライナ出身の歌手であり、バンドゥーラ奏者のカテリーナ・グジーさんによる演奏を披露、バンドゥーラの音色と、澄んだ歌声で会場は魅了された。演奏の合間には、ウクライナの現状と平和への熱い思いを語って頂き、早期停戦の思いを新たにされた。また会場には、戦時資料収集におけるパネルが展示され、廣瀬卓爾理事長の説明のもと、沢山の方々がパネルから伝わる当時の現実に心動かされていた。



カテリーナ・グジーさんによるバンドゥーラ演奏



パネル展示を見る廣瀬卓爾理事長

【第3回浄土宗平和誓願の集い】

《 中四国地区開催 》

日 時 令和6年6月25日(火)14時から
場 所 岡山教区 特別寺院 誕生寺
法 要 平和誓願法要

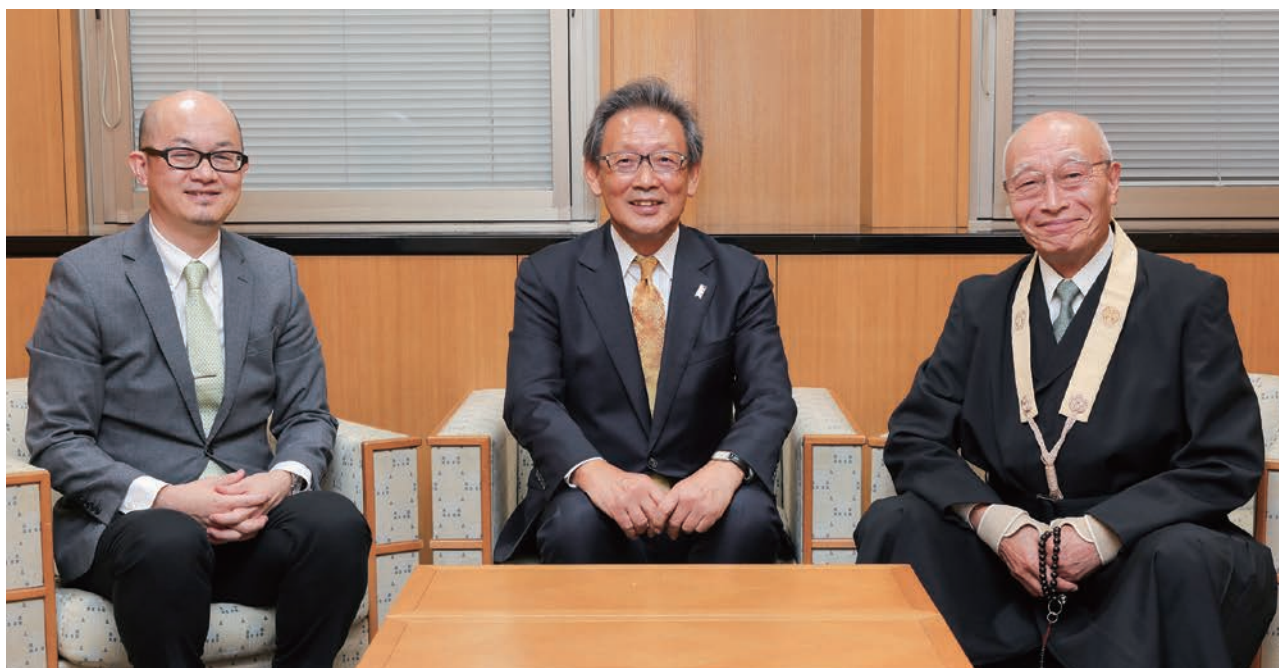
- 記念講演
- パネル展示(戦時資料)

INDEX

FEATURE 浄土宗平和誓願の集い／《特集》ダーナ鼎談：「戦争協力」の実態、明らかに共有したい「平和」への願い／
COMPETITION 第5回平和作文コンクール／COLUMN 《コラム》東京教区権寺 日比野郁皓、滋賀教区正定寺 佐々木昭道／
INFORMATION コラム兵戈無用、編集後記ほか

「戦争協力」の実態、明らかに 共有したい「平和」への願い

ウクライナ戦争は間もなく3年目に入り、中東パレスチナのガザ地区ではイスラエルによる軍事攻撃が続いています。世界で今ほど、「平和」が希求されている時代はないといっているほどです。浄土宗平和協会（JPA）は、宗門人が改めて平和の尊さを考える契機として、日中戦争からアジア・太平洋戦争の終結に至る8年間（1937—45年）、浄土宗教団がどのように戦争に協力していったのかを、残された資料に基づいて検証しました。慈悲や不殺生を説き、武力を用いての争いを否定するはずの仏教がなぜ、戦争を肯定するに至ったのか。明らかにされた歴史は、私たちが今後、国家や社会とどう向き合っていくべきかを示唆しているようです。今回はこの検証作業の意義と今後の課題について、二人の識者を迎えて話し合いました。



「戦時資料」検証の意義を語り合う（左から）大谷栄一教授、赤松徹眞所長、廣瀬卓爾理事長

「戦時資料」報告書への評価

—— 理事長の廣瀬卓爾です。お二方にはご多忙中にもかかわらず出席くださり、ありがとうございます。私ども浄

土協は、ここ4年をかけて浄土宗の「戦時資料」の収集と分析を続けてまいりました。ようやく「報告書」がまとまり、令和5年7月には川中光教宗務総長に手渡すとともに、記者発表も行いました。幸い多くの全国紙・地方紙に取り上

げられ、予想を超える反響がありました。今日は報告書の評価とともに今後、成果をどう活かしてゆくかについてもうかがいたく、この分野の研究をリードされてきた赤松徹真・本願寺史料研究所長をお招きしました。もうひと方は、報告書の取りまとめに尽力いただいた宗教社会学者の大谷栄一・佛教大教授です。お二人は年齢こそ離れていますが、日本近代仏教史研究の同志でもあられます。どうか忌憚のない意見をお聞かせください。まずは赤松先生、報告書を通読されてのご感想はいかがでしたか。

赤松所長 「ずいぶん立派で充実した報告書、という印象です。決してお世辞ではありません。実に多くの資料を集め、多面的かつ詳細に分析されていることに驚かされました。とりわけ目を引かれたのは年表類で、戦争に協力するための催しがいつ、どこで開かれたのか、極めて詳しく記述されています。そのほか教団が戦闘用の航空機を献納した過程であるとか、全国の寺院での仏具や梵鐘類の供出なども、きっちりとめられている。こうした検証は、私の知る限りどこの宗派にもありません。明らかにされた事実の重さを感じます」

—— 先生にそこまで褒めていただき、誇らしい限りです。この報告書ができるまでの経緯を簡単にふれておきますと、私が浄平協の理事長に就任したとき、赤松先生が属しておられる浄土真宗本願寺派（本山・西本願寺）や真宗大谷派（東本願寺）にならって、宗内の「戦時資料」の収集・検証をやらねばという思いがありました。宗務当局や宗議会の賛同も得て、実務のリーダーを大谷先生にお願いしたのです。先生は在家の研究者ですが、浄土宗の僧籍を持つ若手の研究者も率いて難事業に当たられた。先生がいらっしやなければ今回の報告書は存在しなかったと、心から感謝しています。

大谷教授 「この研究分野の先駆者であられる赤松先生から高く評価されたことは、大変光栄です。私は赤松先生が龍谷大学に入られた翌年の1968年生まれですの

で、ずっとのちの世代ということになります。仏教教団の戦争協力という研究の歴史をひもとけば、1970（昭和45）年に出版された市川白弦氏（注1）の『仏教者の戦争責任』が記念碑的なものとされています。その後、2000年代に入ってこの分野の研究は盛んになっており、たとえば浄土宗の若手研究者である小林惇道さんの『近代仏教教団と戦争』（2022年）など、優れた成果が生み出されています」



赤松徹真（あかまつ・てっしん）

本願寺史料研究所所長（仏教史、真宗史）。1949年、奈良県生まれ。龍谷大学大学院博士課程単位取得退学。2011年から17年まで、龍谷大学長をつとめた。著書に『日本仏教史における「仏」と「神」の間』など。眞光寺住職。

—— 私などは、浄土宗の僧籍を持つ若手の研究者に、今回の検証作業へ加わってもらうに際し、「あなたの師僧や同輩から、検証作業に参加することを反対されないか、あるいは忠告などはなかったか?」と尋ねるなど、ずいぶん気を遣いました。師僧の方々の多くは父親や祖父でしょうが、いわば戦争協力の時代の世代ですし、漠然とではあれ、この領域に関わることへの抵抗感や危惧を抱く人も少なくないですからね。でも、私の気遣いは全くの杞憂に終わりました。私は拍子抜けし、逆に戦争協力の責任を問うことは

FEATURE

非に対する問題意識が弱くなっているのでは、と心配したほどです。

大谷教授 「年月を経て、研究者の間では研究の視点が変化していったといえるでしょう。かつてこの問題は、国家に追随し戦争に協力していった教団と大方の仏教者、そしてそれに反対を唱えたごく少数の反戦仏教者という二項対立で語られていました。しかし、ことはそれほど単純でなく、戦争翼賛とも戦争反対とも言えない立場の仏教者がいたり、同じ仏教者でも時代によって戦争の捉え方が変化したりするなど多面的な分析が必要となってきました。二項対立的な枠組みを前提とするのではなく、この問題を実証的に検証してゆこうという姿勢の研究者が増えています」

赤松所長 「世代論だけでは片付かない問題ですが、私は1949（昭和24）年生まれで、いわゆる団塊の世代です。この世代は実際には戦争を体験していないものの、両親や祖父母との日々の暮らしを通して、“戦争の当事者性” みたいな部分を引きずっているのですね。ところが30歳代、40歳代の研究者にはそれがほとんどない。こうした点が研究姿勢の違いにもつながってきているのでしょうね」

仏教教団の「戦争責任」問う

—— 個人的なことをうかがいますが、赤松先生がこうした問題に関心をお寄せになったきっかけは、どのようなものだったのでしょうか。

赤松所長 「私は本願寺派の寺の息子だったので、父の跡を継ぐため龍谷大学に入りました。当時は高度経済成長のひずみである公害問題や、米国が多数の軍隊を送って泥沼化していたベトナム戦争などが大きな社会問題になっていました。大学も学問・研究の自由をめぐる意見対立が生じ、少なからぬ学生がこうした社会の矛盾と向き合い、発言していました。私もそんな一人となって、仲間とともに自分たちの意見をガリ版刷りの雑誌にまとめ、発表するなどしていたのです」



大谷 栄一（おおたに・えいいち）

佛教大学社会学部教授（宗教社会学）。1968年、東京都生まれ。東洋大学大学院社会学研究科博士後期課程修了。佛教大学社会学部准教授を経て2016年から現職。著書に『日蓮主義とはなんだったのか』『ともに生きる仏教』（編著）など。

—— 行動する学生だったのですよね。私は先生より4歳上で東京にある大正大学で社会病理学を学んでいたのですが、平和や戦争に関する問題提起をしたり、行動で意思表示しようとしたりする際には、大学や宗門などから少なからぬプレッシャーのあることを感じていました。

赤松所長 「私の父親は1944（昭和19）年9月、応召しました。もう30歳代の半ばだったのですが、海軍に入ったのです。しかし健康を害して、実家に戻ったそうです。出征にあたっては、遺書を残していました。“自分が戦死したら、寺はどうなるのか”と悩んだ内容で、私はのちにそれを見て、戦争の理不尽さを痛感したのです。私は父に戦争について尋ねることもありましたが、父は何も語らず、“自分の頭で考えなさい”という立場でした。戦争と宗門のかかわりを研究するようになったのは、大学時代の恩師だった二葉憲香先生（注2）の影響が大きいですね。先生は“仏教の本質を理解せず、言葉や現象を追っても意味がない”とおっしゃり、自ら問い、深く思考することの大切さを教えられました」

—— 二葉先生のお言葉は、胸に突き刺さりますね。改めてお言葉の重みを感じます。赤松先生は、「戦争」や「平和」について研究を深める一方で、宗門の活動にも参画されていかれたのですね。

赤松所長 「本願寺派には昭和40年代後半、自民党が靖国神社を国家で護持しようという法案を出し、信教の自由の観点から厳しく反対した歴史がありました。さらに決定的だったのは、1977（昭和52）年、大谷光照門主が引退し、光真門主（現在は前門主）が就任したことです。光真門主は当時31歳と若く、戦争に協力した教団の歴史への反省があった。4年後の1981（昭和56）年9月18日、この日は満州事変（1931年）が始まった日にあたりますが、東京・千鳥ヶ淵の国立戦没者墓苑で宗派として初めての全戦没者追悼法要を営み、戦後50年にあたる1995（平成7）年には、西本願寺で全戦没者総追悼法要を開催したのです。そしてその場で、“宗祖の教えに背き、仏法の名において戦争に積極的に協力していった過去の事実を慚愧（ざんき）せずにはおれません”と、反省の念を明確にしました」

—— さまざまなきっかけと段階があったのですね。私たち浄土宗もやや遅れましたが、ようやく教団の戦争協力の歴史を直視し、二度と同じことを繰り返さないと行動を起こす段階に入ったわけです。こうした報告書を出す今日的な意義を、どのように考えればいいのでしょうか。

赤松所長 「私たち仏教者はそれぞれの教団に属し、日々の生活を営んでいます。複雑化する社会状況にどう対応していくかを考えるとき、日中戦争からアジア・太平洋戦争というとりわけ困難な時期に、自分たちの教団が宗祖の教えに背いて戦争遂行に協力していった事実をはっきりと認め、向き合うことは重要です。国家のあり方とそれに教団がどう対応していったかをしっかり振り返ることは、大きな意味がある。事実をおさえ、報告書にまとめたことは、その第一歩になったと信じます」

「天皇即阿弥陀仏」の戦時教学

—— 報告書の内容にふれたいと思います。赤松先生からは「よくできた報告書」と褒められましたが、大谷先生には満足できない点もあったとか。

大谷教授 「とにかく対象が膨大で、手をつけられなかった部分があったことを認めなければなりません。大きく3点に分かれますが、まず浄土宗の歴史研究についていえば、宗祖・法然上人やその弟子が活躍した中世については丰厚的蓄積があるのですが、近代となると研究が脆弱です。大正大学や佛教大学などの宗門大学が先頭に立って近代浄土宗史の研究者を育成する必要性を感じます。2点目は、検証対象とした資料が浄土宗の“宗報”などの公的文書に限られ、地方教区や末寺の動きまで追えなかったことです。さらに3点目は、海外開教の実態にふれられなかったことです。当時の開教施策や実態が、国策とどのような関係にあったのかについての掘り下げた検証が、課題として残っていますね」

—— 大谷先生が指摘された3点目は、私が長く関心を寄せている課題でもあります。80年代の後半に、浄土宗の海外開教の足跡をまとめる仕事に関係したのですが、浄土宗



FEATURE

開教振興協会からの付託を受けての事業でしたので、開教使の事績を「偉業」として讃える表現が暗に求められ、大変苦労しました。また93年には、韓国ソウル市にある東国大に交換教授として赴任した経験から、韓国の研究者たちが植民地時代の日本仏教の開教施策をどのように論じているかを知ることができましたが、掘り下げることはできず今日に至っています。

赤松所長 「確かに海外開教の問題は重要ですね。本願寺派でもそういう思いが強くなり2008（平成20）年、『アジア開教史』という本をまとめました。資料収集や分析は難しかったけれど、大事な課題であることは間違いありません」



—— 検証の過程では、教団の核心ともいべき教学の面でも、さまざまな問題点が指摘されました。今回の報告書の中では、浄土宗の特徴として「天皇即阿弥陀仏」といった教学が打ち出されたことが言及されています。

大谷教授 「教学には門外漢の私が出しゃばって発言するのをお許しただけならば、天皇を自分たちの教団の本尊になぞらえる考え方は「天皇本尊論」と呼ばれて、日蓮宗の異端的な一派にもみられます。しかし浄土宗の場合、教

学部長という公的な立場にある人物や高位の教学者が発言していることが確認され、このことの意味は大きいと思います。もっとも、資料はごく限られているので、教団内部でどれだけの実質的な重みをもっていたかは、さらなる研究が必要でしょう。このほかにも皇室との関係でいえば、戦時中の浄土宗寺院で、本尊の前に天皇の位牌（天皇尊牌）を安置するよう定められました」

—— 赤松先生にお尋ねしますが、真宗は浄土宗と同様に阿弥陀仏を本尊としています。天皇と阿弥陀仏を一体化する戦時教学は、生まれなかったのでしょうか。

赤松所長 「大谷先生が先ほどおっしゃったように、多くの本願寺派寺院でも、本尊の前に天皇の位牌が並べられていた事実があります。また大谷派（東本願寺）には、のちに宗務総長をつとめる暁鳥敏（あけがらす・はや、1877-1954）のように天皇を「生き仏」とする見方があったようですが、本願寺派ではそのような主張をされる方を確認していません。そもそも真宗には「神祇不拝（阿弥陀仏のみにすがり、神社に参拝しない）」という伝統が形成されていて、それが時に神道界などから国体に合致しないのではないかと厳しい批判を受けておりますが、神社神道非宗教論のもとで国民道徳として受容してきたことがあると思います」

「報告書」どう活かすか？

—— 今後の研究課題も明らかになった一方で、浄土宗にはこの報告書をどのように活かしていくかという課題が突きつけられています。赤松先生、アドバイスのようなものがあればお聞かせください。

赤松所長 「報告書の内容、明らかにされた事実を、教団内部でしっかりと共有することが大切ですね。これだけ立派な報告書なのだから、まずはすべての寺院に届けるべきです。また内容をわかりやすくかみ砕いた冊子のよう



なものも作製し、僧侶や檀信徒の皆さんの研修会などの場で活用していくことも欠かせないでしょう」

——宗門としては7,000カ寺すべてに届けることはできていない状況です。浄平協に加入している500カ寺に配布し、その他約300カ寺から「読んで勉強したいので送ってほしい」という希望が寄せられているのですが…。研修会用テキストの作製も、喫緊の課題であると考えています。

赤松所長 「どんなに充実した報告書でも、内容が共有されなければ意味がありません。私たち本願寺派も2004（平成16）年、戦時中に当時の門主が発布した戦争を肯定するメッセージ（消息）を取り消すことなどを決めたのですが、20年がたち現在の若い世代にはこうしたことへの関心は薄れていると言わねばなりません。研修会などで繰り返し学び、議論していくことの重要性を痛感します」

——若い世代、20歳代はもちろんのこと、40歳から50歳代の浄土宗僧侶にも、戦争や平和について積極的に考えることが少ないのではないかと、関心や意識の低さを危惧し

ています。むしろタブー視しているようにすら見える。經典の読み方や法要時の作法以前に、仏教僧として生きることの確かな意味を、自らが見出す機会を与え育む教育が強く求められていると考えますが、龍谷大学ではいかがでしょうか。

赤松所長 「龍谷大学は5項目からなる建学精神を掲げていて、その一つに全人類の対話と共存を願う“平和の心”を持つという項目があります。とはいえ、実際に学生が戦争や平和という問題を積極的に考えているかとなると、また話は別ですね」

大谷教授 「私が勤務する佛教大学でいえば、全学生に占める宗門子弟の割合は減っているし、平和や戦争の問題を宗門子弟の教育に限定しない方がいいように思えます。一般社会の若い世代にも、仏教の教えに魅力を感じる人は確実に増えている印象があります。私はかつて“おてらおやつクラブ”や“おうみ米一升運動”“サラナ親子教室”などの社会活動に積極的に取り組んでいる浄土宗の僧侶の方々とともに、『ともに生きる仏教—お寺の社会活動最前線』と題した新書（ちくま新書）を編んだのですが、それらの活動から宗教の可能性は大きいと実感しました」

FEATURE

赤松所長 「僧侶の育成ということでは、得度（出家）の際の動機を重視することが重要でしょう。私は海外の研究者と交流することもあるのですが、“私は寺に生まれたので、寺院後継者として出家し、研究者になった”などと話すと、ほとんどあきれられるのです。私はそのように話しません。得度を自発的というか、主体的に選び取る覚悟なしに受式して、ただ何代目だから継職したと言うと、自立した人間とはみなされない。そんな人間に、僧侶としても研究や仕事ができるはずはないという見方です。日本では“動機など何年かやっているうちに生まれるだろう”という人がいますが、本来はそんな悠長なことは許されないのでしょうか」

仏教者ならではのメッセージを

——最後の質問になります。現代社会において、「平和」を実現するために、仏教教団や仏教者が担う役割とは、どのようなことでしょうか。

大谷教授 「長く続くウクライナ侵攻のゆくえが国際問題になっているほか、直近では中東パレスチナでのイスラエルによるガザ地区への軍事行動も激しくなっています。そうした中で、私が個人的に仏教教団に期待するのは、“仏教者ならではの平和メッセージ”を発信してほしいことです。効果や影響があるかどうかは別にして、仏教的な価値観に基いたメッセージを発信することが大切だと思います」

赤松所長 「同感ですね。というのも、現代の若者を含めて多くの日本人の主な関心は、“自らの生活の快適さや快楽を求めること”にあるように感じます。それらとは違った仏教者、念仏者ならではの価値観があるはずで、とくに苦しんでいる人、辛さに耐えている多くの人たちに向けた力強いメッセージを発することには意義があるのではないのでしょうか」

——長時間、さまざまな視点で貴重なご意見をいただきありがとうございました。多くを学ぶことができました。いただいたご提言などを、これからの浄平協の活動に積極的に活かしていきたいと思えます。

【注1】市川白弦（いちかわ・はくげん、1902-86） 仏教学者。岐阜県の臨濟宗の寺に生まれ、花園大学教授などをつとめた。禅を社会倫理的に追究し、平和運動や反戦運動に参加した。

【注2】二葉憲香（ふたば・けんこう、1916-95） 仏教史・仏教思想史研究者。広島県の浄土真宗本願寺派の寺に生まれ、長く龍谷大学で教鞭を取り、1976年から83年まで同大学長をつとめた。

鼎談開催日：2023（令和5）年10月18日
ところ：浄土宗務庁（京都）

「戦時資料」報告書、各紙に掲載され反響



浄土宗平和協会（JPA）は令和5年7月、浄土宗教団が日中戦争からアジア・太平洋戦争の終結に至る8年間、どのように戦争に協力していったかを残された資料に基づいて検証した「報告書」を発表しました。宗務庁で開かれた記者会見には京都宗教記者会所属の記者らが集まり、質疑が交わされました。

「報告書」はA4判170ページ。令和元（2019）年11月、大谷栄一・佛教大教授を委員長に、多くの若手研究者が参加して検証をスタート。4年をかけてまとめました。

内容は「浄土宗の戦時体制や組織」「戦時下の布教方針の変遷」「戦時下の教学・布教活動」「『宗報』にみる軍部および戦時組織との関わりについて」など、6章から構成されています。

会見では、廣瀬卓爾・浄平協理事長が「宗門すべての僧侶が、この報告書と収集された戦時下資料を見つめ、今後の宗教活動に活かすきっかけにしてほしい」と述べ、川中光教宗務総長も「国民の大半が戦争を知らない時代に入り、報告書がまとめられた意義は大きい」と評価しました。

記事は終戦記念日（8月15日）の前後に、さまざまななかたちで取り上げられました。地元京都新聞は8月8日付1面トップで「浄土宗が初の戦争協力報告書」として掲載。読売新聞も8月31日付で、「天皇と本尊・阿弥陀仏を同一視させる戦時教学を打ち出して戦争を宗教的に正当化するなど、宗派を挙げた協力の実態が明らかになった」と指摘しました。また朝日新聞は9月1日付で、報告書の意義や特色について、廣瀬理事長インタビューのかたちで取り上げています。

浄土宗平和協会 第5回作文コンクール受賞者の報告



東海高等学校校長 近藤辰巳先生、加藤智貴さん、廣瀬卓爾理事長



令和5年度の第5回平和作文コンクールは、宗門高校17校のうち東海高等学校・上宮高等学校・樹徳高等学校・京都文教高等学校・真和高等学校・樹徳与野高等学校から412作品の応募をいただきました。

厳正なる審査の結果、下記の表彰対象者5名及び学校賞1校を決定いたしました。

なお、総裁賞に輝いた作品を掲載しましたのでご一読ください。

記

《各賞及び受賞者》

総裁賞	東海高等学校1年	加藤 智貴
副総裁賞	上宮高等学校3年	島本 結菜
副総裁賞	樹徳高等学校2年	森戸 美沙
会長賞	京都文教高等学校2年	有田 芽以
理事長賞	真和高等学校2年	橋本 結依
学校賞	樹徳高等学校	

ふと気が付けば、目前に戦争が

総裁賞を受賞した加藤智貴さんと廣瀬理事長のインタビューから抜粋

廣瀬: 加藤さんは、渡邊白泉という俳人が1939年に作句した「戦争が廊下の奥に立ってゐた」という句を引いて作品を書いておられますが、私は、この俳人の名もこの句もまったく知らずにいて、加藤さんの作文で初めて知ったのですが、加藤さんが、この原句を知った経緯を教えてください。

加藤: 小学三年生の国語の授業で教わりました。俳句の表現法という内容でした。

廣瀬: 渡邊白泉という俳人がどのような人物であるのか、またこの原句について調べるうちに、俳句には「銃後俳句」や「無季俳句」という分野があることなどを知りましたが、俳句という言葉を目にした時に、即座に「季語」という言葉が頭をよぎる私にはとても新鮮な驚きでした。加藤さんは、俳句などの韻文、あるいは文学に関心を寄せているのですか？

加藤: いいえ。私は医系に進もうと思っているので、小説やSF、社会評論などを読むのは好きですが、読後感想文の課題なんかはあまり好きじゃないんです。銃後俳句とい

われる分野や戦争文学に特に関心を寄せているわけでもありません。

廣瀬: えっそうですか？作文の中に「不寛容が蔓延^{はびこ}る時代」って表現がありますね。また「正戦」論にも触れている。きつと、読書好きで現代の社会事象なんかにも強い関心を寄せている生徒さんだろうと思っていましたよ。正戦の表記に「」を付けていますが、これには何か含みというか、込められた意図がありますか？

加藤: 戦争に正義なんてありませんから、皮肉を強調する意味で「正戦」と書いたのです。

廣瀬: 白泉の原句の結句は「奥に立ってゐた」と過去形になっているところを加藤さんは「奥に立っている」と現在形にしていますね。ニュアンスが異なるように私は感じますが、この差異について聞かせて下さい。

加藤: いまの世界の情勢を見ていると、わたしには戦争が徐々に近づいている感じがするのです。気が付けば、もう目前に戦争が迫っているというリアリティを表現しようとしたのです。

戦争は廊下の奥に立っている

東海高等学校一年 加藤 智貴

平和について考える際、私は戦争についてまず考えます。戦争というと、国家元首や軍の幹部といった一部の国の権力者によって引き起こされるものというイメージがあると思いますが、私はそうは思いません。

権力者達は、勝利のために支持者や同盟国を得ようと画策します。そこで、日本が太平洋戦争中に唱えたアジアのヨーロッパからの解放、現在のロシアが主張するネオナチの打倒、また、水や食料の獲得等々の、戦争における「大義」を掲げます。このような「大義」に人々が賛同し、「正義」を唱えて始まるという性格を近現代の戦争は持っています。

平和の実現のために戦争をなくすことは必要です。しかし戦争のないことが平和実現への十分条件かというところではありません。なぜなら、戦争のない状態も時として戦争を引き起こすことがあるからです。戦争指導者がいくらか耳触りの良い「大義」を並べ立てたとしても、それらが人々に受け入れられなければ戦争は起こり得ません。

戦争はある日突然、狂気の独裁者が現れて惹き起こすものではなく、普段から人々の間に堆積していた不満や憎しみといった感情を土壌に育つものです。だから、戦争がななくても、不平等があったり、民族的、宗教的抑圧があるような不安定な社会は、戦争の危険性をはらんでいると言えます。逆に言えば、格差や差別のない安定した社会に戦争

の危険性は少なく、平和に近いと言えます。戦争を予防するには、嫌悪や憎悪を是とする「大義」を支持する風潮が、社会において醸成されることが重要だと考えます。さらには、人々の欲望や不寛容から生じる経済格差や主義主張の対立を、暴力で解決するのではなく話し合いで緩和しようと努力する必要があります。

平和を実現するための論点は、ただ戦争をなくすにはどうすればいいかという点にあるのではなく、もっと根源的な点、言い換えれば、誰もが安心して、自由平等の下に生活できる社会を作るための課題は何かを考える点にあります。

題名は渡邊白泉という俳人の「戦争が廊下の奥に立ってゐた」という句からとりました。彼は太平洋戦争の始まる前に、日本が徐々に軍国主義的になっていき、気づかないうちに戦争がすぐ身近に迫ってきていたという、戦争への恐怖をこの歌に詠みました。

私はこの歌ほど戦争をよく言い表しているものはないと思います。廊下を進んでいるうちに、奥に潜んでいたその姿が徐々に明白になり、気づけばもう間近にいるという不気味な戦争。

今日のような不寛容が蔓延る時代において、私たちは、気づけば戦争は不可避だったとならないように気を付けなければなりません。間違った歪んだ「正義」の付け入る隙を作らないよう、殺人をすら肯定する戦争の異常さと悲惨さを歴史から学び、すべての人が安心して自由平等の下に生きることができるよう、互いに努める必要があると思います。

かや 榎寺と私の活動

浄土宗平和協会 理事 東京教区 榎寺 日比野 郁皓



浄土宗平和協会に参加させていただけることを私は大変うれしく光栄に思っております。自己紹介といたしまして、私が住職しております東京蔵前の榎寺（かやでら）について、また私の活動等について紹介させていただきたいと思っております。

はじめに榎寺について。「榎寺縁起絵巻」によりますと約500年前、浅草隅田川のほとりに、樹齢1000年の榎の大木があり、そこに1人の僧が小さな庵を建て、村人たちはかや寺と呼んでいたそうです。ある日山伏がやってきて、榎寺の僧と榎の実を賭けて碁の勝負をしました。山伏が勝ち、榎の実を遠江国（静岡県西部）に持ち帰ったところ、山伏のお寺の榎の木に実がたくさんできるようになったのです。山伏は自身が火伏の神、秋葉大権現であると告白し、榎の実のお礼に榎寺を火事から守る約束をしました。その後家康の時代、増上寺12世観智国師が榎寺の第1世となり、浄土宗のお寺として開山されました。9世のとき榎の大木が命を終え、その幹で秋葉大権現像が作られました。その後何度も江戸は大火事に見舞われましたが、火伏の神に守られた榎寺は燃えることなく沢山の命が助かったというお話です。この絵巻は1814（文化11）年、国学者で狂歌師の石川雅望と画家栗原信充が描いたもので、現在台東区の文化財となっています。

榎寺の境内には「榎寺学寮」という学生寮がありアメリ

カ人をはじめ、インドや台湾からの留学生たちが住んでいます。毎朝お寺のお掃除をしてくれる学生、お寺でお茶のお稽古や写経に来る学生もあります。初釜やお茶会には着物を着ます。インド人は整頓整理が上手で、台湾の尼僧さんは時々台湾風精進料理を作ってくれます。お施餓鬼や、お十夜には留学生がお抹茶の接待をします。

次に私の「世界仏教徒連盟 WFB」の活動について。WFBはアジア、アメリカ、ヨーロッパ、など世界各国から200団体以上が加盟する仏教連盟で日本からは全日本仏教会が加盟しています。本部はバンコクにあり、11の委員会が救援活動や国際交流活動などを行っています。私は20歳代からタイや、マレーシア等の仏教徒の方々と一緒に救援等を行ってまいりましたので親戚の様に親しい間柄のご家族もあるのです。

もうひとつ、私は大学では英文科でしたが同時に演劇も学びました。その経験を生かして、数年前に「ほうねんさま in 増上寺」という、僧侶と俳優が出演するミュージカルを、大本山増上寺で上演し、たくさんの観客の方に楽しんでいただきました。

いろいろな文化背景を持つ人々と交流して、数十年、お互いの違いを学び、違いを平等に尊重していかなければと思います。戦いをやめられない愚かな私達人類ですが、少しずつでも平和への道筋を探っていかなければならないと考えております。

浄平協唯一の滋賀支部14年のあゆみ

浄平協滋賀支部 副支部長 滋賀教区 正定寺 佐々木 昭道



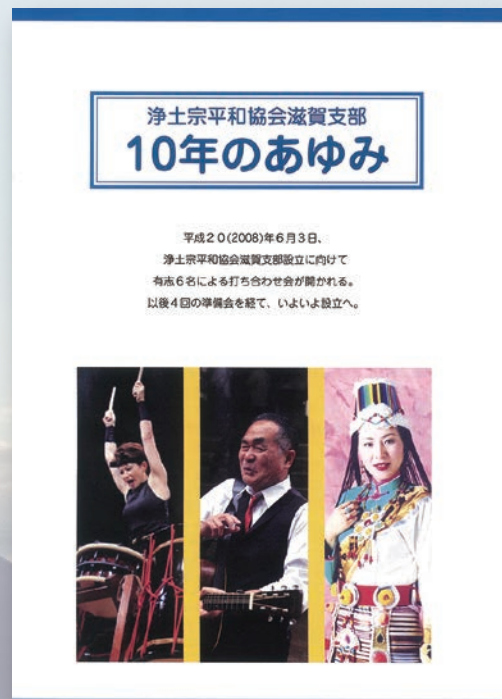
2008(平成20)年6月3日、浄土宗平和協会(浄平協)滋賀支部設立に向けて、有志6名による打合せ会が開かれた。以後4回の準備を経て、2009(平成21)年4月11日、草津市のホテルに於いて設立総会を開催し、浄平協の支部がその産声を上げた。記念講演には浄土宗ともご縁が深い、チベット人歌手バイマーヤンジンさんをお招きし、「ふるさと(チベット)のお歌とお話」をテーマに熱弁を披露された。以後毎年「戦没者・災害物故者追悼平和誓願の集い」を支部のメイン行事として研修・研鑽を重ね、全国浄平協活動へも積極的参加、協力を続けてきた。

その中、特に小職の記憶に残るのが、2012(平成24)年3月25日に開催した「東日本大震災物故者一周忌追悼チャリティー平和音楽祭」である。第一部追悼音楽法要は、佛教大学混声合唱団による音楽法要で約600名の参加者ととも、物故者を追悼し被災地に心を寄せた。第2部平和音楽祭には、京都造形芸術大学(現京都芸術大学)教授高木克美氏率いる和太鼓チームシエンの演奏を皮切りに、フォークシンガー高石ともや氏の歌とトーク、最後にはバイマーヤンジンさんにご出演いただいた。いずれも東日本大震災への支援活動を続けておられた方々によるコンサートで大盛況となり、当日の募金活動も含めて100万超の義捐金を被災地へ送ることができた。

さらに翌2013(平成25)年3月12日にも「東日本大震災物故者三回忌追悼平和音楽祭」を開催。ゲストには仏教尺八奏者寄田真見乃氏、グランドハーブ奏者内田奈緒氏、前回に続き和太鼓チームシエンを招いた。この時は草津市のホテルを会場とし、入場無料で百席限定としたが、開場と同時に即満席となり急遽席を準備して、130名の参加者となった。当日の募金・協力金併せて25万円を被災地復興支援金として浄土宗被災地復興事務局へ寄付した。同年11月には東近江市滋賀県平和

記念館に於いて研修会を開催した事をきっかけにその後、県内外の各地で現地研修を開催することとなった。

2020~21(令和2~3)年はコロナ禍により総会及び諸活動の自粛を余儀なくされたが、これを機会に浄平協滋賀支部発足以来の諸活動をまとめた小冊子「浄平協滋賀支部10年のあゆみ」を編纂した。令和4年12月6日には久々に教区教務所に於いて、平和誓願法要・記念講演会を開催。講師には、第11回浄土宗平和賞を受賞された小泉顕雄師をお招きして「南の国で見つけた生き甲斐〜忘己利他慈悲之極〜」をテーマにお話をうかがい、これを機に小泉師の主催されるフィリピンの貧困地区支援事業に協力することとなった。以上浄平協滋賀支部の活動概要を紹介させて頂いたが、今後も全国浄平協への協力と支援を約束すると共に他教区にも支部の発足を願ってやまないところである。



兵戈無用 浄土宗平和協会理事長 廣瀬 卓爾

銃後俳句と言われるジャンルに「戦争が廊下の奥に立ってみた」という句がある。文学とりわけ韻文の領域に疎い私は、このような俳句があることをつい先日まで知らずにいた。教えてくれたのは、宗門校の東海高等学校一年生加藤智貴君である。本協会が主催している「平和作文コンクール」に加藤君が応募した作品でこの句を私は知った。令和5年度の最優秀作品に選ばれ、総裁賞（総裁＝浄土門主伊藤唯眞猊下）を受賞した最優秀作品である。彼はこの渡邊白泉作の句を引き、かつ白泉から離れて、彼のスタイルと感覚で「戦争は廊下の奥に立っている」と表題を付し、今日の状態を熱く語っている。（加藤君の作品は本誌に掲載しているのでご一読いただきたい）

さて、私はこの作文に導かれ、渡邊白泉の句集を求めて書店に急いだ。「季語を入れなければ俳句ではない！」と繰り返し教わり、芭蕉や子規らの代表作を示

しながら「季語はどれだ？」と質問を受け、ついでに旧暦と新暦によって風物の扱いが微妙に異なることなどを学んだ私などは、「戦争が廊下の奥に立ってみた」の句がなぜ俳句なのかと大いに困惑したのである。無季俳句というらしい。

授賞式のために東海高等学校を訪問し、加藤君に白泉のこの句を知ったきっかけを尋ねた。「小学3年生の頃に学校で習って覚えています」と静かな口調で答える。白泉の結句は「みた」と過去形になっているが、なぜ「いる」と現在形にしたのかについても問うた。ぼそっと呟くように、「いま、戦争への歩みが進行しているように感じ、リアル感を出したかったからです」と返答。

彼の口調は実に穏やかで、抑制的でもあったが、若年代代のこの感受性に触れ、清々しい想いに浸りながら私は学校を辞した。

平和念仏募金のご協力をお願い

平和念仏募金は、各 NGO や NPO 団体への援助、私費留学生に希望図書
を贈呈するブック・ギフト活動、浄土宗平和賞などの活動に充てられます。
何とぞご協力賜りますようお願い申し上げます。

- ◆ ①世界の人々に役立つ、②共に学びあう、③社会にアピールする、④新たな人材を発掘・養成する一との方針のもと、NGO や NPO を支援しております。
- ◆ 私費留学生希望図書購入支援「ブックギフト」事業を行い、留学生の勉学支援をしています。

編集後記

「ローソクは、自らを燃やし、周りを明るく照らす」。これは、布教の場で幾度となく説かれる言葉である。本誌DANAの表紙のデザインは、本会の関係者や種々の事業への取り組みと、私たちの目指すところを表現している。

『浄土宗「戦時資料」に関する報告書』が完成し、宗内外からの反響は大きい。ご執筆いただいた委員諸師並びに資料提供にいただいた各位に深甚の感謝を申し上げたい。

本協会員の方々を除けば、新たに300余名のご住職から報告書の配布希望が届いている。正住職寺院数(約5000)に比して決して満足できるものではないが、関心をお寄せいただいている確かな手ごたえを覚えている。この広がりを期したい。

現下の世界情勢を知るにつけ、痛切に思うことがある。宗内における「平和教育」の重要性と徹底である。本年は平和課題に係る啓発事業にも力を注がねばと思っている。

さて、本年は辰歳である。本協会が昇り龍となり、さらに事業の拡充と堅実な推進に傾注する所存であるが、宗門各位には一層のご支援・ご協力を懇願する所である。(山川)

入会要項 浄土宗平和協会の活動にあなたも参加しませんか？

正会員

対象…浄土宗教師・寺族
会員…年間10,000円

賛助会員

対象…檀信徒、企業や宗教法人以外の団体
会員…檀信徒会員年間2,000円
法人会員年間10,000円(一口)

浄土宗平和協会役員・スタッフ

総 裁	伊藤 唯 眞	参 与	荻野 順 雄
副総裁	小澤 憲 珠	理 事 長	廣瀬 卓 爾
副総裁	福原 隆 善	副理事長	山北 光 彦
会 長	川中 光 教	副理事長	永江 憲 昭
副会長	茂木 恵 順		
理 事	東海林 良 昌	事務局長	山川 正 道
理 事	日比野 郁 皓	事務局次長	宮田 典 彦
理 事	小口 秀 孝	事務局員	小泉 範 幸
理 事	秦 智 宏	事務局員	田中 堅 信
理 事	若山 敦 子	事務局員	樺 随 宏
理 事	山川 正 道	事務局員	真鍋 博 鵬
理 事	加用 雅 信	事務局員	霜村 真 康
監 事	山下 裕 通		
監 事	倉井 正 則		

寺院で回覧してお読みください。

浄土宗平和協会 Jodo Shu Peace Association



編集・発行：浄土宗平和協会事務センター
〒622-0003 京都府南丹市園部町新町火打谷5 教傳寺内
TEL：0771-62-0442 FAX：0771-62-1620

